

ONE LOVE 通信 38号

2008年7月21日発行

2008年6月4日、私、ルダシングワ真美の父であり、ワンラブの第一号支援者である吉田敏夫が亡くなりました。82歳でした。ワンラブ通信第38号は、父の追悼号とさせていただきます。個人的な感情も含まれてしまいますが、どうぞ読んでください。



【ありがとうを心に】

いつかこの日が来ると思っていたけれど、ついに来てしまいました。

父は2007年2月に肺がんと診断され、余命一年と言われました。それから、もう3ヶ月がんばって、6月4日に亡くなりました。父の最期は眠るように穏やかでした。

父は今から30年以上前に私の母を亡くし、それからずっと男手一つで私を育ててくれました。ちょうど感受性の強い時期、父はきっと戸惑い、試行錯誤を繰り返しながら、私の面倒を見てくれたことだろう。学校のお弁当も父が作ってくれた。ある日、赤ワイン入りのいり卵という、不思議なおかずが入っていた時は、ちょっとびっくりしたけれど、父が一生懸命工夫を凝らして、私を喜ばせるために何かを作ろうとした姿が目に見え、胸が一杯になった。

私がアフリカに初めて行くと言った時も、とても心配したことに違いない。そして私がガテラを好きになり、一緒にルワンダで義足作りを始めたいと言った時、もっと心配したことだろう。でもその思いを胸にしまい、私を見送っ

てくれた。そしてワンラブの第一号の支援者となり、陰でずっと支えてくれた。

会う人会う人にワンラブのことを伝え、助成金がもらえそうなどころには連絡を取ってくれ、賞があると聞けば、自ら推薦状を書いてくれた。そしてワンラブ通信を出せば、切手代がもったいないからと、自転車にまたがり、汗をかきかき配っていた。

もしかしたら父は父で、仕事を辞めてから、ワンラブの手伝いをするということ、新しい生き方を見つけたのかもしれない。私から見ても、そんなに誰彼構わずワンラブのことを話すなんて、やりすぎじゃない?と思うこともあったが、その姿が実に楽しそうでもあった。水道メーターを見に来たおばさん、自分が通っている病院に集まるおばあちゃんたち、手続きに行った市役所の窓口の人。私とガテラはどこに行っても、「お父さまからお話は聞いていますよ」と声をかけられた。

そんなに一生懸命力になってくれていた父なのに、そばにいと気がつかない。相変わらず小生意気なことを言って、父を困らせる。



ルワンダに行った私を思いながら、家に一人できつと寂しかったに違いない。でもいつも「お父さんもがんばるから、真美もがんばりなさい」と、古い仮名遣いでメールをくれた。それなのに、日本に帰り、顔を合わせると、相変わらず憎まれ口をきいてしまう私。そんな自分に嫌気がさすものの、優しい言葉を父にかけることができなかった。



七夕祭りにて、ガテラと一緒に

長生きをするだろうと思っていた父が、2007年2月に肺がんと診断され、一年くらいしか生きられないだろうと言うことを聞いた。多分父は自分の余命を知らなかったはずである。いつもいつも、元気になったら・・・と言っていたから。それとももしかしたら知っていて、自分を力づけるために、私たちを心配させないために、言っていたのかもしれない。

父の病気を知ってから、できるだけそばにいたいと思った。ルワンダで仕事をしなくてはいけない自分の立場を悔やんだこともある。病気が一旦落ち着き、2007年の7月から9月まで私はルワンダに戻った。そして10月再び日本に帰ってきた。少し顔を見なかった父は、元気そうでもあったが、足が弱り、杖を使って歩くようになった。食欲はあるものの、段々と衰えていく体力。今まで自分でお箸を持っていた手が動かなくなり、どんなに不安で悔しかったことだろう。そんな父を見ながら、何もできない自分、むしろ親不孝をし通しだった自分が情けなくて、何度も涙を流した。

3月に3度目の入院をした時、主治医の先生から「退院することは難しい」と言われた。覚悟を決めなくては行けない。父が少しでも「生きていて良かった」と思えるような残りの日々を送ってもらいたい。今まで親子らしい会話をしなかった父と私だったが、父が病気になってから、いろいろなことを話した。そして自然に父の身体に触れることができるようになった。物心ついてから、父とスキンシップをしたことなどない。でもベッドにいる父を見て、顔や身体を拭いたり、手を握ったり、そんなことができた自分にも驚いた。人に心配をかけることをとても嫌っていた父は、先生や看護婦さんが来ると、必ずがんばって目を開き、答えようとしていた。

父はがんの疼痛に段々と苦しむようになり、それを和らげるための薬を使い始めた。意識がはっきりしなくなってきた時、主治医の先生が病室に来てくれた。先生が病室を去ろうとした時、父ははっきりと「ありがとうございました」と言った。それが私が聞いた最後の、父のしっかりした言葉だった。

父が亡くなり、今悲しいと言うよりは、喪失感の方が大きい。泣き叫ぶと言うよりは、心にぼっかりと穴が開いたような気持ちがする。

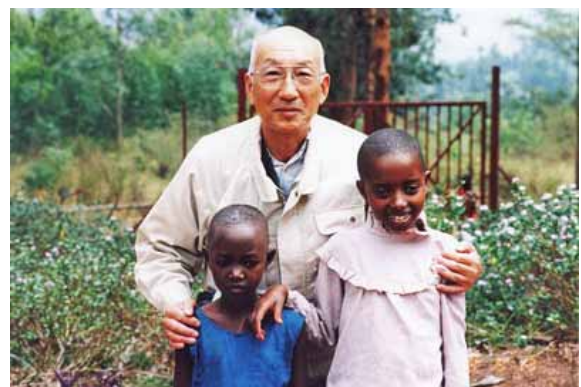
父が亡くなった次の朝、えさを求める小鳥の声で目が覚めた。それを聞いて「もしかしたらお父さんは鳥になって生まれ変わり、空の上から私たちを見守ってくれようとしているのかもしれない」と思った。あるいは私自身が生まれ変わり、しっかり羽ばたけ！と言っているのかも知れないと。

亡くなる時に父のそばにいてことができ良かった。私の自己満足に過ぎないかもしれないけれど、父と一緒に時間を過ごすことができ良かった。ルワンダで活動を始めてから、いつも心配していたことがある。ルワンダは遠い。父にもしものことがあったら、私は間に合わないかもしれない。でも一緒にいることができた。そんな時間をくれた父に感謝する。そして私が日本に残ることを許し、ルワンダで一人奮闘していたガテラにも感謝をする。だけど、やはり後悔する。もっといろいろなところを歩きたかった。もっとおいしいものを作れば良かった。もっともっと話をすれば良かった。だけどその父はもういない。

苦しかっただろうけれど、弱音を吐かずがんばった父。父から学んだ一番大きなことは、人に感謝をするということだった。酸素マスクをつけながら、主治医の先生に言った「ありがとう」の言葉。生きていく上で、忘れてはならない大切な言葉。それを父が思い出させてくれた。

今回、私はたくさんの人にこの言葉を伝えたい。父のことを一緒に支えてくれた家族、私を一人日本に残し、ルワンダでがんばってくれたガテラ。一生懸命父のことを診てくれた先生と看護婦さんたち。それから父の友人や、ワンラブを通して父と知り合ったみんな。

黄色信号は進めだ！と交差点で止まらず、自転車を漕ぐ足に力を入れた姿、ワンラブ通信を折って封筒に詰めている姿、そろばん片手に会計をチェックしていた姿。頭には消えていきます。



＜教会で出会った、女の子と一緒に＞

父は3回ルワンダに来てくれました。アフリカそしてルワンダを知らなかった時は、どんなところだと思っていただろう。そうか、そう言えば虐殺のあった教会で出会った、両親を亡くしてしまった女の子と一緒に写真を撮り、日本に連れてくる手段はないだろうかかと相談されたこともあった。

ルワンダに桜の木を植えられないかと、ルワンダ大使に会いに行ったこともあったらしい。まだその父の夢は実現できていないけれど……。初めてルワンダを訪れた時、なんとなくルワンダの様子がわかり、最初の心配も少し薄れてくれただろうか。「ルワンダから帰ると、お医者さんにコレステロールが高くなっているとわかってしまうんだ」と言っていたっけ。

今私にできることは、父が支えてくれたワンラブを続けていくこと。私が弱音を吐いた時には、穏やかな口調で元気づけてくれた。いつでも味方をしてくれた。あまり会話をしなかった親子だけど、知人に昔話をたくさんしたらしい。そんな話を人から聞くと、切なくもあり、改めて父の姿を見たような気持ちになる。

お父さん、長い間私のことを見守ってくれてありがとう。私はお父さんの子どもとして生まれてきたことを誇りに思います。そしてワンラブを支えてくださる皆さま、父のことをありがとうございます。これから、父に負けないよう、父の気持ちを引き継いで、ガテラと二人でがんばりたいと思います。

また父のことを知り、心配してくださった皆さまには、ワンラブ通信をもって父の訃報をお伝えすることになってしまったこと、お許しください。



ルワンダ事務所代表ガテラより

お疲れさま・・・

ムゼーが亡くなった(ムゼーとはスワヒリ語で、年長者を敬う時に使う総称)。その2週間ほど前、私と真美は仕事のため、アメリカで落ち合った。真美からだいが弱ってしまったムゼーの様子を聞いた。でもまだがんばれると思っていた。

先にアメリカから日本へ戻った真美から電話が入り、ムゼーの様態が悪いと伝えられた。

私の父親は子供の時に亡くなり、母は紛争が始まったルワンダで、障害を持った自分を連れていくことができず、私をおいてブルンジに逃げた。幸い母は元気で今も暮らしているし、時々会いに行ったりもする。もちろん母が年長いて弱ってしまったら、私が面倒を見たいと思っている。

真美は子どもの頃母親を亡くし、残っているのは父親だけである。私がこうして真美に出会えたのも、ムゼーが真美を産んでくれたからである。思春期の女の子を、男手一つで育てたムゼーの苦労は如何ばかりか。きっと人知れない苦労があったに違いない。

前号で、真美を日本に残し寂しいと書いた。もちろんそれは本心である。でも一番真美を必要としていたのはムゼーだ。真美にはもう父親しかいない。自分の代わりはいるかもしれないけれど、父親の代わりはいない。その父親のそばについていて欲しかった。日本では「親孝行したい時に親はなし」という表現があると聞いた。

【いっぱい義足作ったぞ！】

しばらく、私ことルダシングワ真美はルワンダ・ブルンジを留守にしていますが、その間はガテラが奮闘。二つの国を行ったり来たりしています。去年から活動を始めたブルンジ。現在はこちらの方が仕事が多いようです。

前号でお伝えしたように、一挙に大量の義足を作ったあと、また更に大量注文。26人分の義足と16人分の装具。そして杖や車いすを必要とする人たち。今回は活動を宣伝することもあり、大統領府の要人や内務省の大臣を呼んで、作った義足たちを渡すそうです。もちろんこれはワンラブの宣伝にもなるけれど、ブルンジの政府にとってもアピールになる。常にギブ&テイクの状態を作りたい私たちには絶好のチャンスである。



青い服の女性が大臣、車椅子を渡す。

ルワンダでも同じようなことを言う。今自分が存在するのは、自分を産んでくれた親がいたからである。その親に感謝をし、精一杯孝行をするというのは、どこの国も同じである。

それから少し後、真美からムゼーが亡くなったという知らせを受け、言葉がうまく出てこなかった。自分にできたのは、真美を元気づけることだけだった。強くなれ、負けるんじゃない。そう言うことしかできない自分が歯がゆかった。そして喪に服すために、その週ルワンダのワンラブの仕事を閉めた。

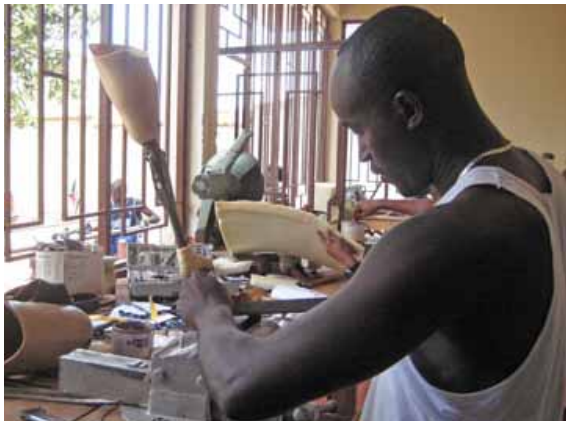
ルワンダから来て、まだ何も無い自分を受け入れてくれたムゼー。言葉がうまく通じないのに、一生懸命話そうとしてくれたムゼー。「男なら始めたことを最後までやり遂げる」と言い、自分のことを「息子」と呼んでくれたムゼー。ありがとう。

ずっと前、初めてムゼーと温泉に行った時、温泉の入りを教えてもらった。背中を流しっこすることも教えてもらった。それから温泉が大好きになった。これから温泉に入るたびに、ムゼーのことを思い出さう。

ムゼーは心優しい、しかしとても芯の強い男だったと思う。ワンラブのことでいろいろな心配もかけてしまった。ワンラブの安泰を、誰よりも願っていた。

自分たちがしなくてははいけないことは、これからも真美と力を合わせ、ワンラブを進めていくこと。楽しいことも辛いことも、これから先たくさんあると思う。でもムゼーが見ていてくれるから、きっとできる。ムゼー、お疲れさまでした。

きっと義肢製作所の中は、また騒々しかったんだろうな。ブルンジは暑いから、来る人もやる人も汗だくだったんだろうな。それにしても、ブルンジは義肢製作所がなかったせいか、義足を必要としている人の多いこと、多いこと。この光景は、97年にルワンダで義肢製作所を開いた時と同じような感じである。朝目が覚めると、門の前には義足を求めてやってきた人が集まっていた。それ以外にも、仕事が欲しいとか、子供の学費を支援して欲しいとか、日曜日にも関わらずドアを叩く人にストレスが溜まったっけ。それと同じ現象が、今ブルンジで起きている。でもこれも、自分たちが蒔いた種。できることはやらなきゃならない。ワンラブを頼って来てくれる人がいると言うのは、ありがたいことである。



＜ブルンジで活躍中、エマーブレ＞

義足を渡す当日は、ボランティアで3ヶ月手伝ってくれた日本の男性も出席。初めてのブルンジと言うことで、道中、擦れた私が忘れてしまった楽しい風景や、人の生活の写真を撮ってくれた。

今回もたくさんの方が集まって大賑わい。ルワンダ・ブルンジの人はお祭りごとが大好きで、ちょっと楽しそうなことがあると、すぐに覗きに来る。う～ん、そういうこともありか？と思うのは、人の結婚披露宴に知らない人が勝手に紛れ込むこと。家族のまとまりが大きいから、呼んだ方も誰が誰だかわからない。それを良いことに、ストリートチルドレンなども飲み物目当てで忍び込んでくる。まあ、きっとそれはそれで良いのでしょうね。

ブルンジに義肢製作所ができたことを、政府はとても喜んで、期待をしてくれている。でも一番喜んでくれているのは、障害者たちだろう。地面を這って歩いていた人、杖の代わりに棒切れを使っていた人、いろいろな人がいるけれど、彼らの生活が少しでも良くなるように、これからもしっかりやろう！でも時々甘えすぎる障害者にイライラしたりもする。打出の小槌を持っているわけでもない私たちは、彼らの際限ない要求に頭を悩ませる。やはり彼らとの間にもギブ&テイクでいたい私たちである。

ブルンジに義肢製作所を開くことによって、当然仕事も増えたとし、集めなくては行けない資金の額も増えたけれど、できるところまでとことんやろう。ブルンジの義肢製作所オープンは、初心を忘れるなど、再度気が付かされた出来事でした。



紹介します！ワンラブのスタッフ

今回はワンラブのセキュリティー、通称システムです。本当はンダザロ・アルフォンスという立派な名前があるにも関わらず、何故かみんなにシステムと呼ばれています。仕事はセキュリティーですが、あまり頼りになりません。それなりに歳を取っていて、走ったり重いものを持ったりするのは、身体に障る。

お酒が大好きで、給料をもらうと次の日は必ずと言ってよいほど遅刻、あるいは無断欠勤。ついつい飲んでしまうのですね。ある日、用事があって呼ぶと、何故か近くに寄ってこない。ピンと来た私は、もう少し近くに寄って話してよと言う。しぶしぶ近寄ってくると、案の定お酒の臭い！「何で給料もらうとすぐ飲んでしまうのー！」とまなじり吊り上げて叫ぶ私に、「酔っ払ってない」と言い張るシステム。段々頭に血が上ってきた私。「それならば10メートル走ってみろ！」「よし、わかった。見ていてくれ」それを聞き、他のスタッフが近づいてくる。みんな呆れ顔である。何故か靴を脱ぎ、走る準備。いざ走ると……。これがまあ、見事な千鳥足！言い訳が泣けてくる。「歳を取って、足が痛いからまっすぐ歩けないんだ……」怒りに震える拳のやりどころを失った私。

そんな感じで、セキュリティーとしては、かなり頼りない。お金がなくて、虫歯の治療ができないんだと口を開いて見せたり（そんなものは見たくないが……）チャップ

リンのようにガバガバの靴を履いていたり、段々と髪の毛が薄くなり、セキュリティーの帽子を取ると、落武者のようだったり。全く頼りにならないシステムではあるが、何故か人には好かれる（と言うより、もしかしたら呆れられているのかも知れないが）、しかもインテリである。家柄も良いらしい。フランス語も流暢に話すので、ゲストハウスに来たムズング（スワヒリ語で、いわゆる白人のこと）とも会話を楽しんでいる。時には、なんだかよくわからない面白計算式を使って、ゲストをびっくりさせている。

そんなシステムは、その人柄ゆえか、ワンラブを訪れたお客さんと写した写真もたくさんある。門の横に建っているセキュリティー小屋にも、彼らからもらった写真をたくさん飾っている。

でも頼むから仕事中は寝ないでください。そして千鳥足で出勤し、回りの失笑を買わないでください。お願いします。

システム
実は、10年近く
働いている、古株
です。



ボランティア 森上さん in ルワンダ



2007年4月～2008年3月まで、ルワンダでボランティアをしてくれた、森上さんからです。ワンラブ滞在を振り返り、原稿を書いてくれました。森上さん、1年間、ありがとうございました。そしてこれからも、よろしくお願いします！

こんなことがあった。

先月の給料の支払いを終えてから1週間もたたずに一人の従業員が給料の前借を申し出てきた。この月はどうしたものか(12月だったせいもある?)。その日に別の2人の従業員が給料の前借を申し出てきた。先月の給料日からあまりにすぐなので、2人とも用途を聞いたところたいしたことではなく、だめだと断った。3人目のその従業員には以前にも、給料の使い方について話をしたことがあったので、さすがにブツツ。

「前回の給料を払ってからいくらもたたないのに、そのお金はどこに消えたんだ！」

「ケン。いろいろと大変なんだ。いろいろなものが高くなってし、妻を病院にも連れてかなきゃならないし…。」

「だから、ずっと前にも言ったじゃないか。出産が来月あって、奥さんも働けなくなるし、子どもにもお金がかかるから、少しビールなんかを控えてお金を貯めとかなきゃだめだって！」

リーダー格の従業員がとりなす。

「ケン。払ってやればいい。妊婦が病院に行くお金だ。事情があるんだから仕方がない。」

「わかってるよ。でも突然の病気じゃない。前からわかってることだ。次の給料日まですら、あと3週間以上あるのに来月はどうするんだ！」

「この国には2種類の人間がいる。お金をもらおうとすぐお酒を飲んだりして使ってしまうタイプと、ちゃんとお金を管理していけるタイプだ。彼は前者なんだ。もし問題があれば追い出せ(解雇)ばいい。」

「違うよ。ちゃんとコントロールできるように教えていかなきゃ、いつまでたっても同じことの繰り返しだ。もういいよ、わかった。払うよ。でも、断言していい。今月10人以上前借に来るぞ。来月10人以上も首にしるっというのか？」



〈真ん中が森上さん〉

きっと、僕は間違っただけではないと思う。でも…。ほかの人を当てにはせず、自分の所有物と人の所有物を区別して(一部そうでない人もいるけど) 将来の計画を立てて、一生懸命働いて富と財産を築きあげてきた僕たち日本人は、彼らより幸せになれるのだろうか？

彼らはもうとびっきりの楽道家たちなのだ。「明日は明日の風が吹く」を完璧に地で行き、「宵越しの銭はもたねえ」やつらなのだ。当たり前のように人の助けを当てにして、また当然のように人を助ける彼ら。しばしば僕は腹を立て、笑っちゃって、ときに尊敬してしまった。もし、僕が何の蓄えもなく、ちょっとした出来事や病気で生活基盤が壊れてしまうような状況に置かれたら、将来のことが心配で心配でいたたまれなくなるだろう。とても毎日笑って暮らすことなんてできなさそうだ。こちらが悔しくなるくらい、彼らは幸せそうで楽しそうなのだ。

でも、でもなあ…。グローバル化の波の中で、経済発展しつつあるルワンダの中で、彼らのような人々は取り残され、悲惨な目にあうことにならないだろうか。

嬉嬉として前借を受け取って出て行った彼は、翌日僕に言った。

「ケン、大丈夫だ。問題ない。」

そして翌月、どうやらガテラさんに助けを求めたらしい。キボンゲ、お前は面白いやつだし好きだよ。でもなあ、ため息が出るのを止められないこの思い、絶対わかってもらえないだろうなあ…。

彼が出て行った直後、また一人の従業員がやってきた。

「ケン。給料の前借がしたいんだけど。」

「どうして？」

「新しい服を買ったんだ。」

僕は思わず、さっきキボンゲをとりなしたリーダー格のやつを見る。彼は前借に来た従業員を睨んで、言った。

「出てけ！！」

協力隊のときにソロモン諸島で学び、ルワンダで復習した、こういうときに必要な言葉をつぶやく。

「ま、いっか。どうにかなるさ。」

繰り返して口にするたびごとに、少しずつ彼らの考え方に近づけたようではある。と同時に、日本での社会復帰に必要なものが溶け出していったような気もする。

ま、いっか。どうにかなるさ！

キボンゲ

キボンゲはあだ名。

意味は太っちょ。

そんなに太っていないのに
なぜか、こう呼ばれてます。

本名は、ジャン・ポール。

仕事は、セキュリティ-です。





日本事務所より

【5月は賑やかでした】

アフリカ諸国の首脳陣が集まって横浜で行なわれたTICAD(アフリカ開発会議)のため、5月は横浜を中心に、催し物がいっぱいありました。また神奈川で健闘しているアフリカ関係のNGOとして、新聞にもたくさん取り上げてもらいました。それらの下準備や催し物で力を貸して下さった皆さま、どうもありがとうございます。またアースデイやアフリカンフェスタに足を運んで下さった皆さま、ありがとうございました。本当にたくさんの方が来てくれました。ブースには義足や写真を飾り、活動の説明をしました。興味深く聞いて下さった人たちがいるからこそ、ワンラブはがんばれます。

それら催し物の時には、ルワンダの紅茶や民芸品・Tシャツ・本などを販売し、予想以上の売り上げがありました。ルワンダから日本へ戻る際に、行商よろしく、民芸品などを持って帰ってくるのですが、ついに手持ちの販売グッズが手薄となってしまうました。今度ルワンダから帰ってくる時に、またたくさん持って帰ってこなくちゃ。日本の人はどんなものが好きかなあなどと考えながら、ルワンダでショッピングするのも悪くない。

【地震と水害・・・その後】

前号にて、ルワンダに地震があり、ワンラブのレストランの一部に、大きな亀裂が入ってしまったこと。また、その数日後に、大雨が降りワンラブ内を流れる川が氾濫。義肢製作所が水浸しになってしまったことをお伝えしました。その後、たくさんの方より、励ましのお言葉、ご支援をいただきました。ありがとうございました。「負けないぞ!」と宣言したものの、心の中は不安でいっぱい。一時はどうなるかと、途方にくれていましたが、みなさまのご寄付により、壊れたレストランは、無事修理をすることができました。そして、営業再開。ほっと一安心です。お休んでいた分を取り戻すべく、がんばっています。

日本でも物価上昇が、ニュースになっていますが、それはルワンダでも同じ。セメントの値段も、どんどん値上がり。頭が痛い話です。ひとつひとつ、問題を解決し、進んでいくしかない。がんばります。

ご支援くださった皆様、本当にありがとうございました。

【朝日新聞“ひと”の欄に紹介されました】

2008年6月1日(日曜日)の朝日新聞に気がつかれた方いらっしゃいますか?第二面にある、「ひと」という欄に、ルダシングワ真美が紹介されました。全国面に記事が掲載

されるなんて!!当日の朝は、新聞を買いに、走ってしまいました。記事を見たよ、と連絡も入り。うれしい限り。記事は左のとおり。ぜひご一読ください。

2008年6月1日

朝日新聞掲載。

この記事は、朝日新聞社の許可を頂き、掲載しています。

無断転記は、固くお断り致します。

【おことわり】

* 発送作業の都合上、振込用紙を必ず同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

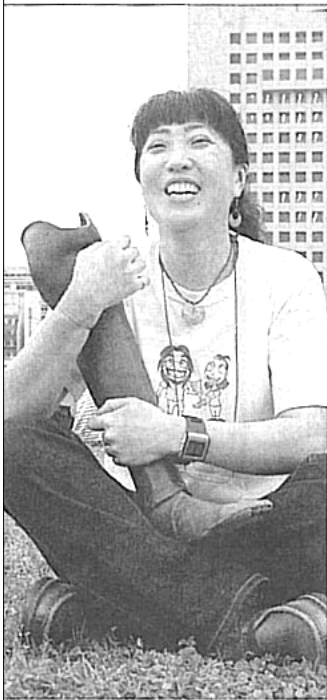
* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

ひと

アフリカで義足づくりを広める

Rudasingwa まみ

ルダシングワ・真美さん(45)



アフリカ中部の小国ルワンダで義足の無償提供を続けて12年。ルワンダ人の夫ガテラさん(53)と立ち上げたNGO「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」は、内戦などで手足を失った障害者計5400人に新たな希望を与えてきた。ベルギーの植民地支配から独立後に続いた民族紛争の果てに94年、約100万人が犠牲となる大虐殺(ジェノサイド)が起きた。障害者も多数残され、その数は約820万の国民の1割、80万人との説もある。気の遠くなる数を前に、義足、義手をこつこつと作ってきた。

神奈川県茅ヶ崎市出身。東京・丸の内に通うOJだった89年、スワヒリ語留学で滞在したケニアの首都ナイロビで、足の不自由な難民のガテラさんに出会った。ガテラさんは91年に来日、2人で訪れた横浜の義肢製作所で義足づくりを初めてみた。「これこそルワンダに必要な技術」。意見は一致し、真美さんはその場で弟子入りを志願、約5年がかりで義肢装具士の資格を取る。ガテラさんは首都キガリに必要土地を確保するなど対外交渉を引き受けた。活動を支えるのはほとんどが個人の善意だ。一時帰国中で、活動の報告会を開き、資金集めにも走る。企業などからの継続的支援を訴える。「アフリカ支援に本当に必要なのは、難しい理屈よりも自ら動く人」

文・写真 安東建

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0054 茅ヶ崎市東海岸南6-6-69 : 080-6564-4448 FAX: 0467-86-2092

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 38号 2008年7月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

http://www.onelove-project.info

